



主要諸元:(1.5G 4WD)

- 全長×全幅×全高/4,400×1,695×1,500mm
- ホイールベース/2,600mm
- トレッド/前:1,480mm 後:1,475mm
- 車両重量/1,485kg
- 最小回転半径/4.9m
- エンジン/1496cc直列4気筒DOHC
- 最高出力/103ps/6,000rpm
- 最大トルク/13.5kg・m/4,400rpm
- モーター型式/交流同期電動機
- JC08モード燃費/16.0km/ℓ
- ミッション/自動無段変速機
- ブレーキ/前:ベンチレーテッドディスク
後:リーディングトレーディング
- タイヤサイズ/175/65R15
- 駆動方式/4WD
- 乗車定員/5名
- 車両本体価格(札幌地区)/2,063,782円(消費税込)

それでは次に、マイナーチェンジのキモとなっている機能面の進化について検証して行く。

まず筆頭に挙げられるのは、先進の衝突回避支援パッケージ「Toyota Safety Sense C」。今回、トヨタのラインアップで初めて標準採用(一部グレードを除く)されたもので、車内に備え付けられたレーザレーダーとカメラを併用した検知センサーからの情報に基づいて、事故の回避や衝突被害の軽減などに貢献するシステムである。レーザレーダーが昼夜問わず近距離を高精度で感知し、単眼カメラが遠方の対抗車や道路の白線などを認識。ブレーキアシスト機能の作動を制御し、先行車の発進や自車が車線から逸脱する可能性を知らせ、夜間走行中にハイビームとロービームを自動的に切り替える。

また、シフト操作時の急発進・急加速を抑制する「ドライブスタートコントロール」も標準搭載。後退時に障害物などに衝突した際、慌てたドライバーがアクセルを踏み込んだままRからDポジション

■**ドライブアシストの充実**

なデザインとなり、現代的な装いとなっている。万人受けするクルマであることを象徴したかのような、見方を変えれば没個性のとも言えた先代モデルのイメージから一歩踏み出し、ステーションワゴンのトップブランドとして個性を主張していくこととする意図が感じられると同時に、トヨタ車の現行のデザイン傾向としっかりとマッチングさせた印象が強い。

イメージを一新して登場



TOYOTA COROLLA FIELDER

■テキスト=青柳 健司(フォトライター) ■Photo=川村 勲(川村写真事務所) ■取材協力=トヨタカローラ札幌 東苗穂店 Tel.011-782-5161

プロフィール

■高い満足度

セダンバージョンであるアクシオとともに、名車カローラの系譜を継承しつつ、前身のカローラワゴンから長年にわたって国産ステーションワゴン部門の新車販売登録台数でトップクラスを維持し続けているカローラフィールダー。2012年のフルモデルチェンジの際には、全長を60mm短縮させるなど、誰もが運転しやすい万能型ワゴンへと方向性を一層明確にしていた。

そして今回迎えたマイナーチェンジでは、安全性能をさらに強化。搭乗者を不測の事態から守り、扱いやすく、便利。それらの特性をワンランクアップさせたのである。またこれと同時に、高級志向に込めるグレードも配備。多くのドライバーが満足できるクルマとしてのアイデンティティが、より鮮明になった。

■先鋭的デザイン

今回はビッグマイナーチェンジの位置づけで、機能・装備はもちろんデザインにも改良が見られることがポイントのひとつ。写真でご覧の通り、ヘッドランプが鋭く直線的でサイドエンドまで伸びやかなラインを描き、シャープなフロントマスクに生まれ変わった。また、ロアーグリル部は大きく大胆な台形型となり、押し出し感が増した。リアビューも、コンビネーションランプがバックドア部まで一体となった流麗

へシフトチェンジしてしまい、急発進によって二次的事故が発生するケースが増加しているが、その被害の軽減をサポートする仕組みである。

そのほか、トラクションコントロール機能、坂道発進のアシスト機能、緊急ブレーキシグナル、歩行者に対する接近通報機能(ハイブリッド車のみ)などに最新のシステムを採用するなど、ドライバーの負担をあらゆる角度から軽減させている。

グイード構成も豊富で、まずハイブリッド車は装備によって4クラスに分かれ、ガソリン車は1.5ℓと1.8ℓに大別されている。1.5ℓガソリン車の場合はFFと4WDがあり、それぞれ装備によって4クラス用意。その上で、マニュアル仕様とCVT仕様の設定がある。1.8ℓガソリン車は、2種のクラスが設定されており、いずれもCVT仕様である。それぞれが、インテリアを白もしくは黒で統一した「WxB」を最上級グレードとしており、より上質な一台を求めるユーザー層にうってつけとなっている。

なお、この「WxB」に加えて、フロントフォグランプなどが装備された「AERO TOURER」(1.8ℓガソリン車のみ設定なし)については、フロントロアーグリルが独特のドットパターンとなっており、他車種との差別化が図られている。

インプレッション

■安定的な走行性

試乗車は1.5ℓガソリン車の「G」



ディーラーメッセージ

トヨタカローラ札幌 東苗穂店
スタッフリーダー

西懸 勝三さん

新しくなったデザインは、特に既存のユーザーの皆様からご好評をいただいております。機能に対する信頼が高いこともあり、クルマを実際に見て「よくなったね」と買い替えを即決していただくケースが非常に多くなっております。インテリアの質感が高い「Wx B」などは、上級車からの乗り換えを検討されている方々もきっとご満足いただけると思います。



リードで、4WD（CVT仕様）バージョン。これに、フロントスポイラー、サイドガーニッシュ、ファンダーガーニッシュなど、オフローダー風にクルマを装う「クロスフィールダーキット」をオプションで備えたもの。ノーマル仕様に比べると、かなりドレッシーに仕上がっている。

発進はいたってスムーズで、さらにアクセルを踏み込めばクイックな反応を示しながら加速。特に、2000回転から3000回転の領域で体感できる推進力は、十分にパワフルだ。シフトを「S」にセットすると、一層スポーティーな走りが繰り出される。なおかつ、エンジンから発生するフリクションは先代モデル同様にしっかりと抑制されており、室内の静粛性も非常に高いレベルにあることから、ドライバーは不安感なくストップ&ゴーを繰り返すことができる。最大出力103ps/6000rpm、最大トルク13.5kgm/4400rpm（仕様によって最大出力・最大トルクともに数値が異なる）を発生するパワーユニットに対する評価も、先代モデルから引き続いて高く、高速道路での長時間ドライブをはじめ悪路や冬道でも、余力十分な走行を約束してくれるだろう。

コーナーでの挙動も安定感に富んでおり、欠点らしい欠点は見当たらない。低速で急カーブを曲がる際のハンドリングもイージーで、最小回転半径4.9m（一部グレードは5.5m）と、このサイズのクルマとしては非常に小回りの効く設計となっていることがリアルに感じられる。この特性は、当然ながら混雑する街路や駐車場でいかに発揮される。縦列駐車もバックで空きスペースにクルマを収める際にも取り回しが非常に楽で、軽自動車並

ミニバンや広大なラゲッジスペースを持つ軽自動車などの台頭により、ステーションワゴンのストロングポイントが浸食されつつある現状だが、ニーズはまだまだ根強く存在するだろう。街乗りや遠乗り、そしてレジャーシーンにおいても、過不足なく役割をこなすステーションワゴンが、その活躍の場を失うことなどありえないことを、今回は再認識した次第である。

国内トップブランドゆえに万人受けを狙った、悪く言えば地味なイメージが強かったカローラフィールダーであったが、デザイン性が高まったことで持ち前の魅力がさらに拡大したとを感じる。先進の技術が投入されたことも、その存在価値を一層高めるに違いない。

■存在価値を高める

みの扱いやすさと言える。個人ユーザーはもちろんのこと、様々なタイプのドライバーが入れ替わりハンドルを握る法人向けのクルマとして長年にわたって高い人気を保っているのも、あらためて納得する。

先述のToyota Safety Sense Cについては、残念ながらひとつひとつの機能をじっくり検証する時間はなかったものの、車線から逸脱する可能性を事前に知らせる「レーンデパーチャーアラート」はしっかりと作動しており、プザーとインパネ内のデジタル表示を連動させながら、はみ出し運転を避けるようドライバーにうながしている。それと同時に、運転者の集中力を切れさせないという副次的な効果も生み出しているようにも感じられた。